

Title	カウンセリングシンポジウム「物語に学ぶ心の世界」報告（2014年度聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催）
Author(s)	越智，裕子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :40-42
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5265
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2014 年度 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催 カウンセリングシンポジウム 「物語に学ぶ心の世界」 報告

2014年11月14日 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催 カウンセリング・シンポジウムが「物語に学ぶ心の世界」とのテーマで講演会を聖学院大学ヴェリタス観教授会室で実施した。演者は3名で、聖学院大学大学院教授 同大学人間福祉学部こども心理学科長の窪寺俊之先生が、『我が涙よ、我が歌となれ』を、聖学院大学大学院非常勤講師・臨床牧会カウンセラー・スーパーバイザーの堀 肇先生が『最後の葉』を、聖学院大学大学院准教授・同大学人間福祉学部こども心理学科准教授 藤掛明先生が『妖怪ウォッチ』を題材にした講演であった。以下、順次に講演内容について報告していく。

1. 『我が涙よ、我が歌となれ』

窪寺先生より、1冊の書籍の紹介がされる。原崎百子（1934-87年）の『わが涙よ、我が歌となれ』である。同著作は、1979年に出版され闘病記である。当時、牧師夫人であった原崎が43歳で肺がんと告知され、闘病経過や亡くなるまでの44日間の日記、遺される家族、幼い子どもたちへの愛の言葉が綴られた日記である。ここでは、愛とは人と人を繋げるだけでなく、人生を生きる力であり、希望の根源であることが書かれている。一方で、原崎は、愛難しさとして愛の欺瞞性（愛の困難性）についても書いている。特に、愛を伝えることの難しさとして、一方向的な押しつけや思い込み、甘えの助長について懸念し、愛は誰もが分かることだが、それを実施していくことの困難さについても語っている。これについて、窪寺先生は、キリストの山上の垂訓の一節である「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」〈マタイによる福音書・七〉、また、「隣人を自分自身のように愛しなさい」〈マタイ 22：34-39〉を活用し、思いを注ぐ、心の重心を相手に移すことは重要だが、本当に他者にそれができるのかとの言葉を聴講者に投げかけている。しかし、先生は原



上段左：阿久戸光晴理事長、上段右：窪寺俊之教授
下段左：堀 肇非常勤講師、下段右：藤掛明准教授

崎の愛の強さを例にあげどのように実施すべきなのか説明している。

原崎は、がんという病に侵され、非常に辛い状況下で、自分の弱さについて十分理解していた。しかし、これら状況下に翻弄されることなく、神を信じ神への愛を貫いている。牧師夫人でもある原崎、牧師の娘でもある。自身もキリスト教大学を卒業し、若くして神との関係について考えることは出来ていた。そのため、肉体はがんの痛みに侵され、愛する家族と過ごす時間への限りを知りながらも、信仰から離れることはなかった。原崎は、最後の礼拝で苦痛に満ち祈ることも賛美することもできず「わがうめきよ わが讚美の歌となれ わが苦しい息よ わが信仰の告白となれ わが涙よ わが歌となれ、主をほめまつるわが歌となれ」との言葉を残したのである。これに対し、窪寺先生は、人は、神への信仰があり、赦された体験から愛は生まれることを述べている。また、原崎の愛は、自身の子どもたちに対しても注がれ、「お母さんをお母さん自身をお母さん自身をあなた方にあげます」

という言葉を残し、わが身を捧げる愛の重さを表している。この苦悩に対し、窪寺先生はイエス・キリストの十字架での愛と同様であることを説明し、講演を締めくくっている。

2. 『最後の一葉』

堀先生は、短編小説の名手であるO.ヘンリー(1862-1902年)の作品を紹介している。

物語は、ニューヨークのワシントン・スクエアの芸術家村で、2人の女性画家(スーとジョンシー)がアトリエを共同し生活していた。ある日ジョンシーが肺炎になり医者にも助かる見込みが少ないとの診断を受けていた。衰弱する中、彼女はベットから窓の外を見るだけの生活を送り、生きる意欲が減退していった。窓ごしの木の葉が落ち、最後の一葉が落ちた時、彼女は自分の命が尽きる時だと告げていた。スーがそれを聞き、60歳の他の画家バールマンにそれを相談した。その画家は馬鹿げた話だと怒った。しかし、次の日も次の日も、雨風が吹いても一葉は残り続け、彼女は自分の考えが間違いであることに気づき、生きる意欲を取り戻し、奇跡的に全快したのであった。その2日後、60歳の画家が肺炎で亡くなった。それは、その画家が描いた最期の傑作の絵(葉)であったのだ。

堀先生は、物語が告げる心の世界について説明している。この物語は、3名の登場人物がいる。その誰の立場に身をおき読むのか、自分の置かれている状況に立ち返り読むことにより解釈が異なるというものである。

登場人物1(スー)の場合:スーとジョンシーは血の繋がりのない他人であるが、趣味が一致し、共同のアトリエで芸術家を志している。ジョンシーが病の中で、希望を失う姿を見て泣き、死の宣言では2人の関係を考えるように励まし、回復した姿をみて喜び抱きしめた。

堀先生は、これが愛だという。相手の悲しみや喜びを自分のものとして感じ取って生きる友情は、血縁、地縁、社縁など他者との関係が崩壊しつつ

ある現代社会の風潮に何か投げかけるものがあるのではないかと述べている。

登場人物2(ジョンシー)の場合:病に伏す中で生きることを放棄する姿がある。下降したエネルギーを引き上げるには、励ますなど自分のことを真剣に心配する他者が必要である。このような篤い友情に支えられながら散らなかつた最後の一葉に生きる希望と勇気を見出している。

堀先生は、着目するのは、内面をそのまま語ることにできた相手が居たことである。そして親身になって絶望的な言葉を受け止め、聞いてくれる相手がいたことである。先生は、喪失感や絶望感をヨブ記を例に「嘆きに場を与えてくれる人」が居ること、魂への配慮があったことで救われると述べている。

登場人物3(バールマン)の場合:バールマンは芸術を志すがゆえに長く貧しい生活に耐えている。世間の評価を気にせず芸術に生きようとする生きざまに真の芸術家の心を見る人は多い。

堀先生は、彼の生涯の最も大きな意味は雨の中にもかかわらず、最後の一葉を書いたことである。たとえ書いたものであっても、その一葉が生きる希望を与えたことであると述べている。

また、それは、作品の語る普遍的にも思われるメッセージの一つである。先生はエミリーディキンソンの「もし一人の人を慰めることができたなら、私の人生に悔いはない」という言葉を思い出した。もし私たちの人生が見栄えがしなくても、誰かのための「最後の一葉」となるならば、この荒涼とした現代社会にあって大きな意味をもつと締めくくっている。

3. 『妖怪ウォッチ』から心の世界を学ぶ

藤掛先生は、社会現象となっている「妖怪ウォッチ」というコミックを紹介している。

物語は不思議な時計を手に入れた少年ケータが日常に潜む妖怪と仲間になりさまざまな問題を解決していくというものである。先生は、物語を理

解するため、いくつかの妖怪を紹介している。人をひきこもりにさせる「ヒキコウモリ」、相手の頭に憑りつくことでその人物の記憶を忘れさせてしまう「わすれん帽」、場の空気を悪くさせる妖怪「ドンヨリーヌ」などである。これら妖怪の意味することとして、子どもたちが、日常で遭遇するネガティブな現象を当事者の問題と考えず、あたかも別の問題者が外在すると考える設定である。これは家族療法やナラティブセラピーの「外在化」の技法と一致している。問題を第3者化（外在化）することで、起きている現象を、冷静に（安全に）考えることができるという治療的戦略と同様なのである。

次に、先生は外在化と物語（ナラティブ）の重要性について述べている。人は自分のつくった物語の中で生きている（支配されている）。しかし、時に物語は、新しい物語に書き換えることで生き方を変えることができる。その一方で、自分の作った奮い物語をなかなか手放すことができないのも現実である。現在の問題が妖怪の仕業と考えてみることは、物語の書き換えを促す強烈な方法にもなり得る。そもそも妖怪伝承にはそうした知恵が含まれている。この外在化は、子どもたちだけでなく保護者も愛読者が多く、癒しの効果があるからだ。一方で世間の中には、甘やかしにならないかとの批判があるが、外在化は、外在化することで問題を認識することにより改善への介入が始められる。この外在化は信仰とも関係し、実はパウロの手紙においても、自分の罪の性質を分析する上で、自分ではなく他のものがしていることが記されている。このように、外在化は聖書の中でも活用されているものである。

最後に、藤掛先生はまとめとして、『妖怪ウォッチ』は、人の心の暗部を、子どもたちなりに直視することで、安心して考える仕組みをもっている。ポケモンが成長とパワーの世界であったことと対比すると、似てはいるが、問題を外在化することの可能な妖怪ウォッチには癒しの要素が加わって

いるとのことである。

以上、「物語に学ぶ心の世界」とのテーマでカウンセリング・シンポジウムが実施され、窪寺俊之先生、堀 肇先生、藤掛 明先生の3名が、各々書籍を活用しながら講演している。物語を読むことにより、さまざまな効果があることは周知されていることである。いずれの物語も、物語の登場人物や作者の意図を通し「愛」や「希望」、「勇気」や「癒し」など心に働きかける作用があることが理解できたかと思う。このように、物語は、自分が追体験すること人生や人間に対する深い洞察力を得、それは、現状だけでなく、自分の生き方にも影響を及ぼすことが可能となるということである。

（文責：越智裕子 [オチ・ユウコ] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程3年）